

第十八回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

新倉 俊一 著『評伝 西脇順三郎』

(2004年11月10日 慶應義塾大学出版会 刊)

新倉 俊一 にいくら としかず 昭和5年(1930)生まれ。神奈川県出身。専攻は、現代詩研究。慶應義塾大学法学部卒業。明治学院大学大学院英文学専攻修士課程終了。フルブライト留学生としてアメリカに留学。ミネソタ大学大学院英文学専攻でM. A. を取得。明治学院大学名誉教授(受賞時)。現在も同じ。著作は、『アメリカ詩論 同一性の歌』、『エミリー・ディキンソン 不在の肖像』、『ノンセンスの磁場』、『西脇順三郎 変容の伝統』、『西脇順三郎全詩引喩集成』、『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』(ロゲンドルフ賞)、訳書に、『エズラ・パウンド詩集』、『ピサ詩篇』、他がある。

受賞のことば

西脇順三郎は第一次大戦後にイギリス留学から帰国して、森鷗外や上田敏の先例にならないヨーロッパの近代文学の紹介につとめ、評論集『ヨーロッパ文学』『超現実主義詩論』や詩集『Ambarvalia』などによって新しいエポックを作りました。そして『古代文学序説』に続く詩集『旅人かへらず』では、「自分の中にもう一人の人間が住む。これは生命の神秘、宇宙永劫の神秘に属するもの」であるとして、「幻影の人」の仮説を打ち立てました。その後の詩作と評論は、みなこの東西文化の対立を越えた深い感性に培われたものです。

最近、海外でも西脇詩の翻訳が進んでいますが、単に近代詩のすぐれた技巧家であるにとどまらず、西脇順三郎は日本の近代風土の世界遺産であると思います。今回の和辻哲郎文化賞の受賞により、西脇順三郎の文化史的意義に照明が与えられたことを、大変うれしく存じます。

《選考委員評》

先駆的詩人論

陳 舜臣

詩人と三十年あまり、密着して文学を語り合った新倉俊一さんの西脇順三郎評伝であり、とうぜん詩人の内面をえがいている。詩人の外面にふれる部分はすくなく、一般の読者が興味をもつ詩人の最初の夫人マージョリ夫人のことなどは、ごく簡単にしかふれられていない。一年前に出された『詩人たちの世紀』をあわせ読めばよいのである。

西脇ほどの大詩人になると、評論するにも切り口が多く、一冊の著書に盛り切れない。この新倉さんの作品は、今後あらわれるにちがいない、おびただしい西脇論の先駆的な基本資料となるはずである。

引用した作品と、評論する地の文章とのあいだに、質的な落差のあることが往々にしてあるが、この作品にはそれがなかった。文学としての評論が成立している。

バタクさいといわれた西脇が、年をとると東洋回帰をしたといわれるが、陶淵明的気分は、詩人のかかなり早い時期からみられる。本書を味読すればそれがわかるだろう。強引な解釈ではなく、味読によってそれが納得できる論法である。

『鹿門』にいたる東洋回帰の過程で、詩人は膨大な漢語ノートをつくっている。そして、同門の人たちが、『ギリシャ語と漢語の研究ノート』として手書き原稿の一部を献呈したという。西脇はときに品がよいといわれるが、あるいはこんな学究的な一面のあることも、その根拠かもしれない。しかし、それも詩作の副産物であろう。西脇順三郎という人は、詩人以外の何者でもない。新倉さんのこの作品を読むと、そのことがはっきりと理解できる。

詩人の故郷の名は、このあいだの地震や豪雪でよく耳にした。詩人の詩碑や西脇文庫をもつ小千谷市に、この機会にエールを送りたい。

梅原 猛

正直にいうと、私は新倉俊一氏の著書『評伝 西脇順三郎』を読むまで、西脇順三郎については、あまり人間の魂の奥に語りかけることの少ない、きらきら光る都会風の詩を作る詩人にすぎないと思っていた。

しかしこの書に引用されている彼の詩を読み、新倉氏の説明を聞くうちに、西脇順三郎についての評価を変えた。もちろん私は今でも西脇氏の詩が十分理解できるとは思っていない。しかし彼の詩の中にある深い諦観、その諧謔と寂寥が少し理解されるようになった。そしておそらく現代詩を理解するにはやはりT・S・エリオットの詩『荒地』を理解しなければならないが、この書を読んで、西脇順三郎訳のエリオットの『荒地』を読みたくなったのである。

西脇順三郎の時代は、折口信夫も慶應大学に在職中で、慶應の文化の全盛時代であったと思う。福沢諭吉の脱亜入欧の精神が西脇順三郎というラテン語でみごとな詩を作る詩人として結晶したといえる。

新潟県の小千谷という田舎町から上京した西脇が、どうして国際的というべき教養を身につけ、学識あるイギリス人女性を妻として、海外から高く評価される詩を作る西欧風の詩人となったのか。そして西脇は晩年、故郷をしのぶ歌が多くなったが、それは果たして日本回帰であったのか。

このような点についていま一步突っ込んだ追究が必要だと思ったが、それは忠実な弟子としては書きにくいことであったにちがいない。

和辻哲郎文化賞受賞作には和辻哲学に似合わしい品格が必要である。この書は、よき日の慶應大学の品格の高さを今の文化の大衆化の時代においてみごとに所有しているといえる。その点で、われわれはこの作品を和辻哲郎文化賞にふさわしい作品と考えたのであるが、この西脇順三郎という巨大な無を抱えた詩人についてのいまひとつ突っ込んだ評伝をもう一冊、書いてもらいたいと思うものである。

山折 哲雄

西脇順三郎という星を両手で把捉し、これを自在に批評するような仕事は、誰にでもできることではない。何しろ、日本語はおろかラテン語や英語やフランス語の調べにのせて詩を書き、象徴詩やシュルレアリズムの分野に先駆的なクワを入れた詩人である。それだけではない。古代文学から二〇世紀文学まで、詩論であれ文学論であれ、その鋭敏な感覚を通して同時代の若き芸術家たちの魂を揺さぶった振舞いは、この日本列島の規格を踏み破った精神の勁さを感じさせずにはおかない。T・S・エリオットやエズラ・パウンドと親交を結び、ついには日本芸術院会員、日本現代詩人会会長、文化功労者の榮譽を総なめにし、八十八歳の天寿を全うした経歴は、何とも威風堂々たるものだった。

いったい、どこから踏みこみ、攻めこんだらよいのか。詩人の内部をどのように切り裂き、そこから噴きだす血流をどのように料理すればよいのか。著者・新倉俊一氏の工夫は並大抵のものではなかったにちがいない。あえてその特色をあげれば、氏のまなざしがいつも、この西脇順三郎にたいする敬虔の一線から逸脱することがないのが印象的だ。おそらくそのためであろう。師のそば近く寄り添い、その実生活と作品を凝視しつづけた者にしてはじめて可能となる細心の評伝が、こうしてでき上ったのである。その意味において本書の性格は、西脇順三郎の人間と作品を自在に批評し論じつくそうとするところにあるのではない。あくまでも詩人の魂の内面のドラマを、広い視野のもとに表現された詩の言葉を唯一の支えとして再現しようとしたところにあるというべきだ。

そのため一個の評伝としてはなお、人生における明暗、その光と影のゆらぎの世界に筆が及んでいない憾みはのこる。だが、文中しばしば登場する萩原朔太郎、三好達治、そして西脇の評価をめぐる議論には、この詩人の本質をえぐる重要な手がかりが示されていて興味深かった。